

『時間意識についてのベルナウ草稿(1917/18)』を読む

村田 憲郎

(東海大学)

1. 『時間意識についてのベルナウ草稿(1917/18)』の成立事情

フッセリアーナ第XXXIII巻『時間意識についてのベルナウ草稿』(以下『ベルナウ草稿』と略記)に収められているのは、1917年7月30日から10月1日まで、および1918年2月1日から4月27日まで、フッサールがシュヴァルトツヴァルトの避暑地ベルナウに滞在している間に執筆した、時間意識に関する草稿群である。これらの草稿群は、時期的に初期時間論(Hua. X 所収、1901-1911)と後期時間論

(Hua. Mat. VIII 所収、1929-34)の間であって、フッサールの中期時間論をなしている。実はすでに時間論の主要著作である『内的時間意識の現象学講義』(以下『時間講義』と略記)のハイデガーによる編者序文でも、この研究草稿への言及があった。「その後の、特に1917年以降に、個体化の問題と関連して再び行われた時間意識の諸研究は他日の公刊を期して保留した」(Vorl., 1=3)とあるのは、この『ベルナウ草稿』のことである。

フッサールに『ベルナウ草稿』の研究を促した外的要因は、彼がベルナウに滞在している間、エディット・シュタインの訪問を受けたことだとされている。助手として初期時間論の編集を任されていた¹彼女は、1917年の7月に一通りの編集を終え、師に進捗を報告し指示を仰ぎつつ共同で作業したと思われる。実際9月8日付のインガルデン宛の手紙で、彼女はフッサールが時間論の考察に熱中していることを報告している(S.XIX-XX)。

1. その他『論理学研究』第六研究の改訂稿の整理や『イデーニ II』の編集も任されていた(S.XIX)が、事象的にもこれらのテーマは時間論に関わる主題である。

フッサールにとって当初は初期時間論の推敲であったものが、手を加えていくうちに新たな問題事象が展開を見せはじめ、他の草稿や講義で試みられた問題系とも関連していった。彼は1918年ハイデガー宛の手紙では「時間と個体化、諸原理に従う合理的形而上学の刷新」(3月28日付)と目下の自らの取り組みを表現しており、同年4月5日付のインガルデン宛の手紙では「私は単なる時間の現象学に従事しているのではなく——純粋にそれだけを切り離すことはできません——個体化という、つまり個的(したがって「事実的」)存在一般の、しかもその本質的な基本諸形態に応じた構成という、途方もない問題全体に従事しているのです」と述べている(S.XXII)。

こうしてフッサールは、この草稿をもとに、新たな著作の出版を計画するに至る。1927年に彼を再訪し、公刊予定の『時間講義』の原稿を読んで感銘を受けたインガルデンに対し、フッサールははるかに重要なものがあると告げ、ベルナウ草稿を見せて、「これが私の主著だ。あなたにはこれの準備をしてもらいたい」と言ったという逸話が知られている(Ingarden1968, 154=1982, 225)。インガルデンがこの依頼を辞退した後、草稿はフィンクの手に渡り、1929年1月29日にはフィンクは体系的な「編成構想 Dispositionsentwurf」および原稿の配列案をフッサールに提出している(Ingarden1968, 250-52=1982, 225-6)。その後、矢継ぎ早に構想された別の出版計画に紛れて霞みながらも、フッサール自身は時間論の出版にも依然として執着を見せており、1931年から32年にかけて書簡の中でこの計画が繰り返し言及されている。1933年の終わりには彼はフィンクとの共著という形で『時間と時間化 *Zeit und Zeitigung*』と題する著作を構想する(これの第二巻で「1930年以降の時間研究」と言われているものがC草稿に当たるとされる)。こうした共著の計画は1930年代を通じてしばしばなされたようである。

しかし結局のところ、他の出版計画が優先され、時間論の著作の公刊は実現されることなく終わった。その後草稿はフィンクの私有物として保存されていたが、1969年に彼からルーヴェンのアルヒーフに渡され、識別記号“L”を付してL草稿として分類され保管されていた。

最初にこの草稿の存在に注意を喚起したのは上述のインガルデンであると言える。彼はフッサールから受け取った手紙をもとに書簡集を編纂し、『ロマン・インガルデンへの書簡 *Briefe an Roman Ingarden*』として1968年に出版したが、その中で自身のベルクソン研究に由来する、ヒュレー的与件の地位についての疑問をめぐって、1916年および17年秋にフッサールと立ち入って議論したことを報告している

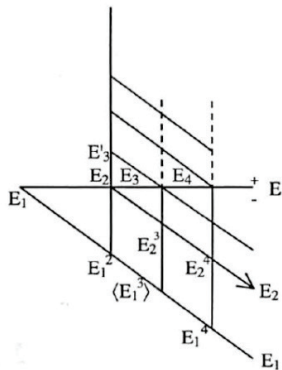
(Ingarden1968, 121f=1982, 179f)²。これは『イデーニ I』では簡略な叙述に留められたヒューレ的・実的与件の時間的所与性の問題³について、当の草稿内で詳細に語られていることを期待させるものであった。

またもう一つの重要なコンテキストになったのは、後年編集を任されたフィンクの哲学との関連である。フッセリアーナでの『ベルナウ草稿』刊行以前のもので最も詳細な研究は、フィンク研究者ブルジーナ(Bruzina, 1993a, b)によるもので、ここではフィンクがベルナウ草稿と対決しながら、いかにして独自の時間論とそれにもとづく「非存在論 Meontologie」を彫琢していったかが論じられている⁴。

2. 『ベルナウ草稿』の諸主題

1) 把持の二重の志向性から予持の二重の充実化へ

『ベルナウ草稿』でまず眼を引くのが、直近の未来にかかわる志向的意識である



Nr.2, § 2, S.22 から

「予持 Protention」の詳細な議論である。初期時間論では主に直前の過去にかかわる把持 Retention の働きが扱われ、予持が主題となることは稀だった⁵が、ここでは予持に焦点が当てられる。ちなみに、初期時間論で「原印象」と呼ばれていた現在の瞬間を捉える働きは「原現前化 Urpräsentation」と呼ばれ、「絶対的意識流」は「原プロセス Urprozess」と呼ばれるなど、若干の用語の変化が見られるが、予持、原現前化、把持という三つのミニマルな志向の絡み合いとして、この「原プロセス」の機能が説明される点は

2. ヒューレ的与件の地位に関する問題は、ここでは最初に正当化されるべき認識を循環から守るという認識論的な問題から議論されているが、その後インガルデンにとって、実在論と観念論との抗争を決するポイントへとその重要性を増していった。(植村 2014) 参照。

3. 「幸いなことに、われわれは、われわれの準備的分析においては、その分析の厳密さを損なうことなしに、時間意識の謎を、問題の圏外に置くことができる」(Hua., III/1, 182)。

4. フィンク独自の時間論については、(武内、51ff)をも参照。武内はフッサールの時間論にある個体化の問題に光を当てている点で、「絶対的意識流」を強調してきた従来の時間論研究に対して際立っている。

5. 「予持 Protention」という語は(Hua. X, 297ff)に登場する。予持が主題的に論じられる『時間講義』§24 はむしろベルナウ草稿と同時期に加筆された。また「予持」の語なしにそれに相当する直観的予期が論じられるのは、(Hua.X, 139,154,167ff)等。

初期時間論と大きな相違はないと言える。しかしこの働きを説明するダイアグラムは、以前は把持のみを表現して逆三角形で描かれていたが、予持への注目によってその機能が上半分に補完され、平行四辺形となる（上図参照⁶⁾。

予持を重視することによってさらに、この「原プロセス」が、志向—充実という枠組みの中で捉え返されることになる。つまり、空虚志向としての予持は原現前化によって充実化され、直観的性格を受けとるが、その反対に原現在化は把持へと変様することによって「脱充実化 entfüllen」される。したがって原プロセスは、原現前化を直観性の最高頂とする、充実化と脱充実化という二方向の推移として性格づけられる。こうして『論理学研究』では認識の正当化をめぐる議論の中でキーワードとなった「充実化」が、『ベルナウ草稿』では意識流の生動性を描く用語として位置づけられることになる。

このことの帰結の一つが、初期時間論の最終的な到達点であった「把持の二重の志向性」(Hua. X, 80f, 379f)に対する別様の把握である。初期では意識の諸要素が絶えず流れ去るにもかかわらず、意識はいかにして通時的統一を維持するのかという問題に対して、把持が持つ二重の働きが引き合いに出されていた。すなわち一方では把持の「横の志向性」が内容を引き止め、その内容を「内在的对象」として持つ意識がまた流れ去りつつあるのを、把持が「縦の志向性」として働いて引き止めているという理論である。この議論は先反省的な自己意識を説明するものとして注目されてきたが(cf, Zahavi, 72ff, 122)、しかし把持の働きがミニマルな自己意識を可能にするのであれば、この自己意識は事後的であらざるをえないという難点も指摘されうる(S.3f)。

そこでフッサールは Nr.1 において、「予持の二重の充実化」(S.29-30)を議論している。予持は一方でそのつど特殊な内容に向かう志向⁷⁾であり、そこで予持された内容が原現在化へと到来することにおいて、実質的な内容により充実化される（「特殊的充実化」）。しかし他方で、把持が単独のものではなく、具体的には常に「把持の把持の把持…」という鎖状に連なっているのと同様、予持もまた「予持の予持の予持…」という連鎖をなしている。したがって特定の内容 A に対する予持

6. E₁, E₂, E₃, E₄, …の水平の系列は現在における時間経過の系列を表し、縦の垂直線は現在の瞬間における把持と予持の共在を表す。時点 E₂ から E₂³—E₂⁴ という右下に伸びる系列が過去への沈み込みを表しているのに対し、時点 E₃ や E₄ から左上に伸びる線が未来からの到来を表している。

7. なお予持はそれ自身では未規定であり、把持や過去の類型的沈殿物と絡み合うことによってしか限定を受けることができない。この意味で「過去のスタイルが未来へと投影される」(S.38)。

P(A)は、以前の予持 P(P(A))が現在においてすでに充実化されたものでもあることになる。こうして以前の「私の意識が予持している」という意識そのものの予持が充実化され、こちらの充実化は途切れることなく継続することで、予持意識の連続性を形成することになる（「普遍的充実化」）。つまり、到来した知覚内容は必ず「私が予持した」という「私」の性格を暗黙裡にはあれ帯びていたのであり⁸、この性格もまたともに充実化され、それが自己意識を形成する。こうして把持ではなく予持の二重性に着目することで、充実化による先反省的自己意識がまさしく現在の只中で可能となるような議論を、フッサールはここで試みている。

2) 客観化された時間、ノエマ的時間性

時間意識の現象学は、まずは「客観的時間」を遮断し、「現象学的・内在的時間」へと立ち返る(Hua. X, 4f, 187f)とされる。したがってこの「内在的時間」の探究は、志向的意識そのもののノエシスのないしヒュレー的な実的契機に対して反省的にアプローチするものと一般に捉えられてきた。しかし『ベルナウ草稿』の主にグループIIでは、いったん時間を構成する意識へと立ち返った上で、そこから客観的時間がいかにして構成されるかという問題が論じられ、ここで構成された客観的時間は「ノエマ的」時間性と呼ばれる。

もっともここで「客観的時間」と呼ばれているのは、初期時間論で遮断された「世界時間」や「自然の時間」(Hua. X, 4)が扱われる箇所もあるが、主には、体験が位置づけられる現象学的時間、ただし時間位置の固定的同一性によって規定されるいわば単線的な時間のことである。これは体験に固有の時間ではあるが、しかし体験も時間内の出来事ではあるのだから、時間の中で特定の位置を持つ。ちなみに、特定の出来事が持つ時間的性格においては一般に、一方で「明後日」「まもなく」「今」「さっき」「しばらく前」「昨日」「昨年」など、今との関係によって規定され、時間の経過とともに変化するものと、他方で「Xより以前」「Yと同時に」「Zの一時間後」「そのとき」「あの日」「当時」など、時間が経過しても変化しないものとに区別されるが、ここで客観的時間と言われているものは、後者のような不動の時間位置や不変の時間関係の系列である。

このような時間性の整備は、意識体験を一義的に時間的秩序の上に位置づけるための準備作業、いわば地ならし的な意義を持っていると言える。実際、『イデー

8. もちろん「期待はずれ」や予期しないもののケースもあるのだが、その場合の驚きや意外性の感覚がまさしく、暗黙裡にはあれ私が何ごとかをあらかじめ待ち受けていたことを証示していると言える。

I』における純粹意識の一般構造の議論は、この構成された時間の上を動いていたとフッサールは繰り返し注記している。「現象学的時間」もまたそこに体験が位置づけられるような構成された時間軸なのであり、これを前提してはじめて、純粹意識の領域が「それだけで一つの完結した研究区域をなしている」(Hua., III/1, 182)とフッサールは言うことができた。というのも、もしこの時間軸がすでに想定されているのでなければ、『イデー I』で言われたように、事物の所与性に対して体験の所与性を対置し、体験は「その現在において、つまりそのいまの各点において、<内在的>知覚において絶対的なものとして与えられている」(Hua., III/1)とは言えないはずである。実際「原プロセス」において、予持・原現前化・把持の三つの微小な志向の絡み合いの中で与えられる体験契機が、「絶対的なものとして」与えられるのはどういうことかということは決して自明ではない。この困難な問題に対してフッサールは暫定的に、現在という時間点の系列としての単線的な時間軸を想定し、そこにおける時間位置において体験は存在者として個体化されている、という構えをとっていた。『ベルナウ草稿』における時間の客観化の理論は、『イデー I』で棚上げにされたこの問題を解明するものなのである。

こうして示唆されるように、客観的時間の構成は個体化や存在論化といった主題と結びついていく。

3) 「統握内容－統握」図式の行方

メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』でその主知主義的性格を批判しつつ、時間論におけるその破綻を積極的に評価して⁹以来、「統握内容－統握」図式¹⁰とそこからの脱却の過程はよく注目され、フッサールの(初期)時間論の主要なストーリーと位置づけられてきた。何ものかを或るもの「として統握する... als ... auffassen」<＝把握、解釈する>というこの図式は、『論理学研究』以来、意識の極めて一般的な構造だとされ、とりわけ知覚経験などの説明によく使用されているが、時間意識

9. (Merleau-Ponty, 178)。そこで彼は脚注で『時間講義』§1の注(Hua. X, 7)「すべての構成が統握内容－統握という図式を持つわけではない」という箇所を引き合いに出している。

10. もともとこの図式は、ブレンターノの「根源的連合」説への不満から導入されたものである。ブレンターノは表象という一つの作用種の内部で時間的差異を説明しようとしたため、表象内容に新たな内容が付け加わることによって、時間的性格の変様を説明することになった(例えば「音」は、「過ぎ去った」という表象内容が新たな部分として付加されて「過ぎ去った音」という新たな全体をなすことになる)。しかしフッサールは、原印象的な「音」でも把持的な「過ぎ去った音」でも同一の音が志向されていることを尊重し、両者の違いは統握のあり方だとして、同じ音内容が「いま」として、あるいは「過ぎ去った」として統握されることが時間性の相違をなすと捉えた。

の現象学においてこの図式によって時間構成を説明することの問題、とりわけ幾つかの無限遡行を引き起こすという問題が指摘されてきた。まず第一に、統握内容に「現在として」「過去として」等々の統握が施されることではじめて時間的对象が構成されるのであれば、統握以前の与件の内容は「無時間的」ということになってしまう。そこでこれを避けるために新たな統握作用が導入されるのであれば、無限遡行に陥る。また第二に、統握作用以前に、感覚内容の統一はすでに形成されているのだろうか。もしそうだとすると、統握が意識作用一般のごく基本的な機能に関わっている以上、この統一が形成されるプロセスは「無意識的」ということになる。あるいは、意識の領域である以上全てが意識されている必要があるとすると、別の内的意識が必要になるが、この内的意識自体が統握作用なのであれば、やはり無限遡行に陥る。

そこでこの問題を解決する対案として提起されるのが、絶対的意識流の自己構成の説であり、これによれば時間的对象の構成もミニマルな自己意識の成立も把持の二重の志向性によって説明される。また把持の二重性は同じ一つの働きを機能面から分析したものであり、ここでは「構成するものと構成されるものとが互いに合致している」(Hua., X, 83, 381)ことによって、無限遡行を引き起こすようなギャップは生じないとされた(Bernet, Lff)。

しかし『ベルナウ草稿』を踏まえた上であらためて強調されるべきは、「統握内容—統握」図式は決して解決済みの問題になったわけではなく、むしろ再び吟味され、より詳細に検討されているという点である¹¹。

とりわけ先の(2)で見たような客観的時間の構成に関して、繰り返し統握作用が引き合いに出されている。具体的には、すべてすでに初期時間論にある理論であるが、おおよそ以下のような三種類の理論が見られる（なお各理論の名称はすべて報告者によるもの）¹²。

a) 端的な統握理論 (Nr.11 等)¹³。原プロセスにおける予持・原現前化・把持による時間性格（例えば「まもなく」「いま」「たったいま」等）がすでに統握の所産で

11. James Mensch は、この図式の批判を「ルーヴェン（＝フッサール文庫の所在地）の伝統」に帰している。具体的には R.バーム、J.ブラウ、R.ベルネット、T.コルトゥームス、L.ローデマイヤーがこの伝統に属するという(Mensch, 153)。

12. 以下の三つの統握説については、(村田 2016) で論じた。三つの説の難点をそれぞれ指摘しながら、最終的に b)説と c)説との折衷案がもっとも見込みのある理論として提案されている。

13. 初期時間草稿のうちでも最も早い時期の草稿 (Hua., X, 173, 195)に見られる理論。またそこでは統握と同じ働きが「統覚 Apperzeption」とも呼ばれている。この理論は時間性の構

あると考え、時間的変様を統握の仕方の差異と捉える。時間性格が一元的に統握作用の所産として捉えられるが、複雑な時間的様態の変化をすべて統握作用の変化として説明できるかという点に疑問が残る。

b) いまの刻印理論 (Nr.16 等)¹⁴。いま点において与件は統握作用による時間位置の刻印を受け、その時間位置が客観的時間位置として固定化され、与件が流れ去りながらいまとの距離においては時間性格の変様を被る (この変様自体は統握ではない)。この時間点は時間的変様や沈殿においても保持され、後から遡って指示される。ただし常に意識されている働きではないため理論の正当性が問題であり、また構成する根源をそれ自体として素朴に前提したものであるため、懐疑論に耐ええないのではないかという恐れがある¹⁵。

c) 事後的反省による統握理論 (Nr.9, 12 等)¹⁶。原プロセスにおける予持・原現前化・把持の働きによって感覚内容の統一があらかじめ形成されるが、それを時間対象として客観化するのには反省的な統握作用である。客観化は自我が関与する能動的な統握作用において起こるので、記述的に接近可能で、b)のような懐疑が入りこむことがない。ただし、原プロセスにおける感覚内容の統一は反省に先立って形成されている必要があり、ここには無意識が想定されるべきか、またいかにしてこの原プロセスが記述されるのか、といった問題が解明を要する。

フッサールが時間客観化において主に依拠しているように見えるのはc)の説であるが¹⁷、ここから先行する原プロセスの自己構成の解明が別の問題として立つこと

成を説明するものとして、ブレンターノの「根源的連合」説に対する代替案として導入された。(村田 2016) 参照。

14. この理論もすでに 1906/07 年の講義『論理学および認識論への序説』に同じような議論がある(Hua. XXIV, 264ff)。

15. 例えば初期時間論のテキスト Nr.6(Hua., X, 158)では、記憶や想起の明証性が問われており、神がいまある通りに記憶を備えさせてわれわれをいまの瞬間において創造したとすれば、という想定が可能である以上、記憶は原理的に欺きうると述べられているが、ここでの議論はそのような懐疑に耐えられないように思われる。

16. この説は『時間講義』では附論 IX に見られる。そこでは統握作用に先立って「原意識 Urbewusstsein」が成立していることが述べられ、無意識を想定することによる無限遡行は退けられると主張される。ただしこれを含めた『時間講義』の附論はおおむね、1917 年夏以降にエディット・シュタインが作成し、その後 1928 年にハイデガーが作成したものとしてされている。

17. 先述のように、ここで c)説と b)説の折衷案が可能である。反省における客観的時間位置の付与において、それと相関的にその時間位置が現在であったようなかつての経験が b)のようなものとして遡及的に現れてくると考えるべきだろう。その場合 c)の方が権利上先行し、b)は c)のもとで、時間位置の意味から要求されるものとして想定されると捉えるべきである。

になる。Nr.10では、この原プロセスを無意識の過程だと解することによって無限遡行を回避する試みも見られ、またグループIVに見られるように、自我の関与が薄いこの領域に対して、発生的現象学の問題系が開かれることになる¹⁸。

4) 「原象 Urstand」としての自我

上述のc)説のように、時間客観化が自我の反省的関与による能動的な働きだとすると、それ以前に構成されている感覚内容の統一は勝義での自我の関与なしに形成されるのでなければならない。こうしてフッサールはNr.14において、自我が関与しない「根源的感性 *ursprüngliche Sensualität*」(S.275)の層へと還帰する。この層は、「まったく自我を欠いた」感性的傾性、連合と再生の感性的傾性、それによって規定される地平形成」(S.276)が働く場だとされる。

この層は、のちに「自我的な *ichlich* もの」とミニマルな相関をなすことになる「自我と疎遠な *ichfremd* もの」(S.288)を純粹に取り出した層だと考えられる¹⁹。この場合この相関は勝義でのノエシス—ノエマの相関ではなく、『イデーニI』では実的成素とされて、自我の側、ノエシス側にあるヒュレー的与件が、にもかかわらず自我に由来するものではないという点で *ichfremd* と呼ばれ、自我的な *ichlich* 傾向や働きと対をなすのである。

この事情にともなって、自我も反省において対象的に捉えられる同一的な極自我という明示的な性格を失い、暗黙裡に働くような、機能する自我という特徴づけを帯びる。とはいえこうした自我が触発され、あるいは衝動的に関心を振り向ける層は、低次ではあっても自我の関与が見られるので、「根源的感性」の領分から区別されて「興奮性 *Irritabilität*」(S.276)の領分と呼ばれる。実際に発生的現象学の出発点となるのはこちらの領分ではないかと考えられる。ではなぜ「根源的感性」にまで遡る必要があるかと言えば、具体的な記述に対して事後的な分析によって「自我と疎遠なもの」をいったんそれ自体として純粹に抽出することにより、発生的分析の指標となり遡及の目標となるような領域を、いわば理念的の根源としてあらかじめ

18. 発生的現象学の方法に関して言えば、Nr.14にはっきり見られるように、感覚与件の層それ自体が後から分析し抽象化する作業の産物である。実際、発生のプロセス自体に記述的にアプローチすることは困難であるため、概念の要請に依拠し（あるいは概念を批判的に吟味し）、また想像変更や思考実験なども駆使して、可能な限り論証的に振る舞うべき問題系が発生的現象学であると、現在の発表者は考えている。

19. この相関は例えば1919年夏の「自然と精神」講義(*Hua.Mat.*, IV, 24f)などで詳細に論じられる。

確定する必要があるからであろう。こうして *ichlich-ichfremd* の対は、発生的分析を進める上でも重要な操作的概念となっていく。

またこの箇所では、自我そのものの「超」時間性が指摘される。そこでは自我はそれ自身存在者ではなく、あらゆる時間的存在者に先行するものとして、対象 *Gegenstand* ではなく、対象性を欠くがあらゆる対象に先行する「原象 *Urstand*」であると性格づけられている。

同一的な極としての自我は、あらゆる諸体験にとっての、およびあらゆる諸体験それ自身の志向性のうちに存在的に *ontisch* 完結しているもの（例えば思念されたものとしての思念された自然）にとっての、あらゆる時間系列にとっての極であり、必然的に「超」時間的なものであって、時間がそれにとって構成されるような自我であり、それにとって時間性、個体的に単独な対象性が体験領分の志向性において現にそこにあり、しかしそれ自身は時間的ではないような自我なのである。それゆえこの意味において「存在するもの」ではなく、あらゆる存在者にとっての反対物であり、対象 *Gegenstand* ではなく、あらゆる対象性にとっての原象 *Urstand* である(S.277)。

この箇所に大きく感銘を受けたフィンク²⁰は、存在者 *on* に先行しそれを可能にする「非存在者 *me-on*」をその原理とする、「非存在論 *Meontology*」を構想することになる(Bruzina1993a, 363f)²¹。

5) 個体化の現象学

『ベルナウ草稿』の取り組みは、先述のようにハイデガー宛て書簡の中で、フッサール自身によって「個体化の現象学」や「合理的存在論」などと表現されているが、実際個体化という主題は、この草稿の内実をなす重要かつ興味深いテーマである。すでに初期時間論に属する1905年の「ゼーフェルト草稿」(Hua. X, 237ff)等でも存在者の個性性を時間性によって規定しようとする議論が見られたが、『ベルナ

20. この箇所は他にも、反省的な自我の対象化に先立つ、先反省的な *Self-Awareness* の役割に着目して、経験の一人称性の揺るぎなさを主張したザハヴィ(Zahavi, 190)、対象的に捉えられる他者および自我に先行し間主観性に意味を与える「原自我 *Ur-ich*」に注目した田口茂(田口、94)らの論者達によって早くから注目されてきた。

21. しかし同時に、超越論的観念論から自我性をめぐい去ろうとしていたフィンクが最も強く異論を抱いたのもこの箇所であったという(Bruzina1993a, 371f)。

ウ草稿』のそれは形式的・領域的存在論とも関連し²²、より体系的な議論になっている。

ここでの個体化論の基本的なアイディアは、一つには、対象の個体的同一性を客観的時間位置の同一性とみなすことにある。この観点は『ベルナウ草稿』に限らずフッサールの他の諸著作にも見られるが、もう一つには、個性を一つの世界（および一つの時間）と相関する存在者の唯一性のうちに見る視点もある。後者の観点は前者と結びついていてもいるが、『ベルナウ草稿』では後者の観点から唯一の現実世界における経験対象の時間性と、複数の世界が可能な、想像世界における想像対象の「擬似一時間性」とが比較される²³。

例えば、経験対象は個体の場合一回的であり(S.294)、その内容は真理を持つか否かの決定に服する(S.330)。現実世界のうちに存する個体どうしの差異は現実世界という「一つの世界」の範囲内でのみ可能である(S.339)。これに対して、想像対象の場合、絶対的な一回性が欠けており(S.333)、個体的に同一であるかは問題にならず（「あるメルヒェンの中に現れるグレーテルが他のメルヒェンに現れるグレーテルと同じグレーテルか...を問うことには意味がない」(S.337)、また二つの個体が以前／以後の関係にあるかということは問題にならない(S.291)、などとさしあたり言われる。

しかし想像に対してより解像度を上げた説明も見られる。まず第一に、諸々の想像がより包括的な想像世界へと統合され、現実世界と同様に一つの統一的な擬似一現実性を形成するケースが考えられ、その場合には全体的な想像の内部で個性が問題になりうる(S.335f)（この関係はシリーズもののフィクション作品などに類比することができる）。それゆえ一つの世界に相関してのみ個体的差異が問題になるという上のテーゼは想像世界にも一般化可能であるように思われる。

22. 個体ないし「トデ・ティ」をめぐる諸々のアプリアリの議論はテキスト Nr.17 が興味深い。そこでは同じ自然的存在者についても、時間位置によって規定される形式的個性性に関わる「形式のアプリアリ」（これは「自然」や時間という領域的なものに関わっているゆえに、「トデ・ティ」ないし「このもの」が『論理学研究』第三研究や『イデー I』の第一章で言われているようには、形式的存在論が扱う形式的アプリアリではないように思われる）と、その存在者の種的な「何性 Washeit」(S.299)あるいは「性質態 Qualifizierung」(S.302)に関わるアプリアリとが区別され、因果性は後者に関わるとされる。つまり因果性は自然的個体一般の不可欠の要件として考えられてはならず、むしろ記述的特性どうしの一般的関係であることになる。

23. 想像対象が持つ擬似一時間性については（谷、336f, 357f）参照。なお、この種の議論が見られる『経験と判断』§39,40 は、ローマーによれば L 草稿すなわち『ベルナウ草稿』のグループ V と同じ草稿群から取ってこられたものである。（Lohmar, 63f）参照。

しかし第二に、知覚における現実的措定との連関が与えられるような想像の場合 (S.333-4) (例えば、既成の事実から出発して限定的に状況を想像変更し、「もしあのとき…だったら」などと反実仮想的な状況を想像する場合) には、想像といえども想起や予期と統一されるのでなければならず、ある種の (条件法的な) 正当化に服することになる²⁴。この場合には、想像世界は現実世界と同じ資格で完結していると言えるような「一つの」世界とは言えず、むしろ現実世界に従属する下位世界のようなものと考えべきかもしれない。

つまり、想像世界の現実世界に対する類似性にもかかわらず、現実の経験は想像が持つことのない積極的な規定を持っているように思われる。このことは、『ブリタニカ草稿』などで言及されることになる、本質真理にかかわる形相的学としての「第一哲学」と、現実的な事実に関する学としての「第二哲学」との関係に、再考を促すことにならないだろうか²⁵。一般的な形相的アプリアリない本質真理は、現実世界と想像世界との両方に共通の真理であり、その限りで現実世界の探求は、第一哲学の研究に従属的な地位にとどまる。しかし第一哲学としての本質学ないし現象学に対して、事実に関わる第二哲学ないし形而上学が本質真理のもとに包摂される単なる個別事例を扱うだけにとどまらず、「事実」や「現実性」の解明に特有の積極的な課題を持つならば、第二哲学は第一哲学より優先されるとまでは言えないにせよ、第一哲学にはない固有の問題系を探求する必要が出てくる。というのも、本質真理が現実的存在者と可能的存在者に等しく妥当する真理だとしても、この意味での本質真理では間に合わない特殊な性格を現実の経験は持っていることになるからである²⁶。

24. このタイプの想像における対象の措定は、理性の判定に服する「想定作用 *Annehmen*」が論じられた『イデーナ I』§110 と同じく「発端を置く *ansetzen, Ansatz*」という語で表されている (S.330ff, 355)。(渡辺二郎訳では *ansetzen* が「論題提起的定立作用」、*Ansatz* が「提起された論題・発端」と訳されている)。*Ansatz* は「仮言的判断の前件ないし後件」として理性の裁きを受ける、と言われている (Hua, III-1, 249)。

25. 『ブリタニカ草稿』によれば、自己を根本的に正当化する学としての哲学は「第一哲学としての形相的現象学 (あるいは普遍的存在論) と、第二哲学とに区分されるが、後者は、諸事実の全総体についての学問である」(Hua., IX, 298)。そしてこうした事実についての学をフッサールは「形而上学」と呼んでいる。ただし『ブリタニカ草稿』では、第一哲学は第二哲学のための「方法」の総体だと言われており、この見解をフッサールはおおむね堅持した。(Kern, 333f)参照。

26. コルトームス (Kortooms, 206f) もまた、フッサールの個体化の主題の強調は、第二哲学としての形而上学を発展させたいという欲求と関連していると考えている。

6) 受動的再想起について

グループ VI では再想起が主題となる。再想起は『イデーニ I』では想像や言語表象と同じ「準現在化」の一種として扱われるが、ここではさらに立ち入って、再想起による過去の対象や過去の体験の構成が議論される。

まずそこでは再想起が、「思い浮かぶ *einfallend* 想起」と「構成的な生き生きした想起」(S.362)、あるいは「浮かび上がる *Auftauchen* という様態」と「明示的な再想起」(S.370)に区別される。前者は明示的な「過去の」という意識を伴わずに浮かび上がってくるいわば受動的な想起体験である。実際、前者は本来的には「想起と呼ばれるべきではない」(S.363)。というものはっきりと現在と別次元にある過去の地平を伴っているのではなく、むしろ「根源的志向の地平に属している様態」(S.363)だからである。つまりこの再想起は本来は過去であるにもかかわらず、直観的な現在の地平に、いわば領域侵犯的に浮かび上がってくるのである。

このような受動的再想起に対して、明示的な構成する再想起は、志向に対する充実化のような関係にある。つまり、反復的な複数回の想起を貫いて、過去の対象の同一性を（これも客観的時間位置として）構成するとともに、それと相關的な想起体験の「かつての知覚体験」としての自体所与性を可能にする。確かに、再想起において「充実化」や「明証」を語ることは違和感があるかもしれない（特にその可疑性を考慮すれば）。しかし少なくとも明証の「それ自体を与える」という性格から考えれば、「過去の」存在者それ自体にアクセスすることができるのは何らかの再想起を通じてでしかない以上、そのような特権的な再想起の諸条件を考察することは許されるだろう。

そして、あらゆる現実の想起はかつての知覚の再生である以上、完全に規定された唯一の想起系列をたどって必ず現在の知覚に到達するということが、理念的可能性として主張される（附論 XXI）（同じことは予期についても言われる）。ここにも、知覚と想起（予期）からなる現実の経験が唯一の系列として、想像の無限の多様性とは対照的に持っているような、積極的な規定が見られ、第二哲学としての形而上学の問題圏が垣間見える。

ただしフッサールの時間論にとって現在の地平は根源的であるが、これと能動的再想起によって開かれる過去の地平とは断絶がある。その両者を媒介するのが受動的再想起の役割だと言える。つまり受動的再想起は知覚的現在という「根源的志向の地平」において萌芽的に現れながら、純然たる再想起へと明示化し展開することによって、強い意味での過去を構成するのである。そのようにして私の過去の体験

系列の自体存在を構成することによって、『受動的綜合の分析』第四部に見られるような、「意識流それ自体」の構成(Hua. XI, 192f)への道が開かれることになる。

このようにして、志向と充実化による体験の自体所与性の実現、客観的時間の構成、体験の個体化などの諸主題とともに、再想起の議論もまた、「認識現象学」²⁷から出発した時間論が「存在論化 Ontologisierung」(Bernet, LIX)へと向かう歩みの特徴づけていると言える。

7) 時間意識と有限性。神の時間意識と死

このような歩みが『ベルナウ草稿』全体を貫いているとすれば、フッサールがインガルデンに対してこの草稿を「主著」と呼んだことも理解しうるように思われる。つまりこの歩みは認識論的な出発点としての顕在的な現在意識から、過去と未来にわたる私の意識流の統一の自体存在の獲得へと向かっていく歩みであり、また第一哲学としての形相的な超越論的現象学と、第二哲学としての事実性の形而上学との関係を解明する歩みでもある。最後にこのこととの関連で興味深い二つの点を指摘したい。

まず認識論的な出発点としての現在について示唆的であるのは、Nr.2に見られる、現在の意識流の、「神的意識」との比較である。そこでは現在の意識流は世界の全知 Allwissenheit を含んでおり、この点では「神的意識」と変わりはないと言われる。確かに意識流の過去と未来の地平は直観性を失った「暗さの地平」に取り巻かれることによって限界を持ち、その意味では有限であるが、この制限は偶然的なもので、この限界を拡張していけば、そのまま完全な明晰性が無制限に広がっている神的な意識になる(S.46-7)。したがって生き生きした現在を中心とする意識は、神の意識と程度の差はあれ、構造上の大きな違いはないことになる。この箇所からフッサール特有の神の観念について多くの推測がなされようが、少なくとも直観性による認識批判というモチーフの共通性にもかかわらず、カントとは対照的に人間の有限性と神とがあまり対立的にとらえられてはいないとは言えよう。

もう一点は「死」をめぐるものである。一つには死は（また誕生や眠りは）²⁸、私の意識の生を一つの個体として、つまり客観的時間内での一つの持続する存在者だと考える限りでは、その持続の終わり（ないし始まり、中断）の点と位置づけられることになるだろう。しかしここでも存在論的な本質には一人称的経験における認

27. 『時間講義』の冒頭、「§2 客観的時間の遮断」にある表現(Hua. X, 8)。

28. 「誕生」、「死」、「眠り」は、C草稿で頻繁に語られる主題である。

識論的なアクセスの仕方についての指定も含まれるべきだとフッサールが考えているとしたら、単なる時間内の特定の出来事にはとどまらない困難をこれらの現象は抱えることになる。

まず単に、超越論的ではなくても通常の意味で一人称的経験によってアクセスできないという意味での困難が考えられる。この場合私が経験できないが現実世界に属している様々な出来事は、私の誕生や死などに限らない。このレベルで考えると、この問題の困難の度合いは歴史的な過去の事実や、空間的に遠い場所での出来事などと同程度である²⁹。それゆえこのレベルの議論であれば、基本的には「段階的構成」の発想で処理するという筋道が考えられる。つまりまずは客観的な空間と時間を超越論的な構成によって確保し、その上で、その空間時間内での特定の事象にあくまでも経験的な私が直接的にアクセスできないということはあるのだから、間主観性や世代性の議論を経由して、間接的にアクセスしようとすることになる。このプログラムは確かに遠大で、どの程度見込みがあるかも見極めがたいが、少なくともさしあたり超越論的構成の議論を根本から揺るがすものではないだろう。

しかしより深く深刻なレベルでの死をフッサールは考えているようにも思われる。つまり直観性が最高度に達するはずの知覚の現在点において、可疑性を排除できなくなるという難点である。初期時間論のさらにごく初期に属するテキスト Nr.3 (1901年頃)でフッサールは以下のように自問している。すなわち、次の瞬間に知覚に想起が結びつくこと(つまり内的時間が経過し時間的変様が起こること)を私は明証的に知っているが、この予期は必ず充たされる「十全の予期」ではないのか。しかし私が死んだ場合にはどうなるのか(Hua. X, 154)、という具合である。これと同様のことが、「予持の二重の充実化」について言いうる。予持が現在において何らかの仕方で充実化されることをやめることがあるとすれば、それは私の死である。しかし明証性の中心である超越論的主観性の現在において、この可能性を認められるのか³⁰。もし認められるとしたら、死は第二哲学ではなく第一哲学のテーマになるのか、あるいは本来第二哲学のテーマであるものが第一哲学を脅かすことになってしまうのか。

29. このレベルの議論であれば、「段階的構成」の議論で処理できるように思われる。つまりまずは客観的な空間と時間を超越論的な構成によって確保した上でならば、その中での特定の現象に経験的な私が直接的にアクセスできないとしても、間主観性や世代性を援用して間接的にアクセスすることが可能である。

30. (de Warren, 197)をも参照。ド・ウォレンによれば、そもそも予持は私の予持である以上、私とその未来の時点において生きていることを前提しているため、私は私自身の死を想像できないことになる。この意味で「意識は自分自身を不死として意識している」(ibid)。

いずれにせよ、フッサールには縁遠いとされてきた有限性や死というテーマもまた、以上見たような諸考察を経由し、第一哲学と第二哲学との関係を整備することで、新たな相貌とともに浮かび上がってくるかもしれない。

文献

- Bernet, Rudolf 2013: „Einleitung“ (in: Edmund Husserl, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins* (PhB.649) Felix Meiner Verlag, hrg. v. Rudolf Bernet, 2013)
- Bruzina, Ronald 1993a: „The Revision of the Bernau Time-Consciousness Manuscripts: Status Questions – Freiburg, 1928-1930“ (in *Alter* 1. 1993, p.357-383)
- 1993b: „The Revision of the Bernau Time-Consciousness Manuscripts: New Ideas – Freiburg, 1930-1933“ (in *Alter* 2. 1993, p.367-395)
- de Warren, Nicolas 2009: *Husserl and the Promise of Time. Subjectivity in Transcendental Phenomenology*. Cambridge University Press.
- Husserl, Edmund: *Husserliana. Gesammelte Werke*. Springer Verlag.
(フッサールへの指示は、(Hua, フッセリアーナの巻数, ページ数)で表す。
第 XXXIII 巻のみ省略し、テキスト番号は Nr.、節は§、ページ数は S で表す。)
- 1928: *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*. hrg. v. Martin Heidegger, Max Niemeyer Verlag (邦訳: 『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳、みずが書房、1967年) (Vorl.と略記)
- 1985: *Erfahrung und Urteil. Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. (PhB. 280) hrg. v. Ludwig Landgrebe. Felix Meiner Verlag (EU と略記)
- Ingarden, Roman 1968: *Briefe an Roman Ingarden. mit Erläuterung und Erinnerungen an Husserl*. hrg. v. Roman Ingarden. (Phaenomenologica 25) Martinus Nijhoff, 1968 (邦訳: 1982 『フッサール書簡集 1915-1938 フッサールからインガルデンへ』桑野耕三・佐藤真理人訳、せりか書房、1982年)
- Kern, Iso 1975: *Idee und Methode der Philosophie. Leitgedanke für eine Theorie der Vernunft*. Walter de ruyter
- Kortooms, Toine 2002: *Phenomenology of Time. Edmund Husserl's Analysis of Time-Consciousness*. (Phaenomenologica 161) Kluwer Academic Publishers, 2002

- Lohmar, Dieter 1996: „Zu der Entstehung und den Ausgangsmaterialien von Edmund Husserls Werk *Erfahrung und Urteil*“ in: *Husserl Studies* 13, 1996, pp.31-71
- Mensch, James 2010: “Retention and the Schema”. *On Time – New Contribution to the Husserlian Phenomenology of Time*. ed. Dieter Lohmar & Ichiro Yamaguchi, Springer, 2010
- Merleau-Ponty, Maurice 1945: *Phénoménologie de la Perception*. Gallimard, 1945
- Zahavi, Dan 1999: *Self-Awareness and Alterity. A Phenomenological Investigation*. Northern University Press, 1999
- 植村玄輝 2014 : 「現象学の伝統における観念論・実在論問題を描き直す」『立正大学哲学会紀要』第9号、pp.65-85、2014年
- 田口茂 2010 : 『フッサールにおける〈原自我〉の問題 自己の自明な〈近さ〉への問い』法政大学出版局、2010年
- 武内大 2010 : 『現象学と形而上学 フッサール・フィンク・ハイデガー』知泉書館、2010年
- 谷徹 1998 : 『意識の自然 現象学の可能性を拓く』勁草書房、1998年
- 村田憲郎 2016 : 「時間はいかにして意識において構成されるか フッサールの時間の現象学における三つの統握理論」『東海大学紀要文学部』第105輯、pp.1-16、2016年